

実践における保育の質 —保育者の言葉かけとこどもの反応を行動分析的視点から分析する—

駒沢女子短期大学 川 口 めぐみ

The Quality of Childcare and Education in Practical Childcare : Behavioral analysis of children's reactions and the words of childcare workers

Komazawa Women's Junior College, KAWAGUCHI, Megumi

要 約

こどもは、保育者の言葉によって行動を統制したり集団生活におけるルール等を学んだりしている。しかしながら、保育者の言葉かけがこどもの行動にどのような影響を与えているかを具体的に検討した研究は少ない。そこで本研究は、言葉かけに対する保育者の認識について明らかにし（研究1）、実際の保育においてどのような言葉かけがこどもの行動に影響を与えているのかを分析した（研究2）。結果、保育者は言葉かけの重要性を強く感じ、慎重に選択していることが明らかとなった。また、こどもの行動にポジティブな変化を与える言葉かけがある一方、こどもの行動変化を生まないネガティブな言葉かけがあることも明らかとなった。保育の質が叫ばれている昨今、こどものよりよい発達を促すためには、保育者の言葉かけはこどもの行動形成において重要な刺激であることを示唆する。

【キー・ワード】 言葉かけ, 行動分析, 保育の質

Abstract

Children control their behaviors and learn the rules of communal living with others through the words of caregivers. However, few studies have concretely examined the effects of caregivers' words on children's behaviors. This study investigated caregivers' recognition of words spoken to children (Study 1). Moreover, the type of words that affected children's behaviors in practical childcare was analyzed (Study 2). The results indicated that caregivers recognized the importance of words and selected them carefully. Some types of words had positive effects on changes in children's behaviors, whereas others had negative effects and did not change their behaviors. Improving the quality of childcare has been recently advocated. It is suggested that caregivers' words are important stimuli in children's behavioral development.

【Key words】 Giving words, Behavioral analysis, Quality of childcare

目 的

乳幼児期は、人格形成の基礎を培う非常に重要な時期と言われるほど著しい発達の変化をみせる。特に脳神経の発達は著しく、脳を構成する神経細胞が機能的分化や機能的ネットワークを形成し、複雑な情報処理が行われるようになる。このため、この時期の初期経験や刺激、環境や人とのかかわりは重要であり、これらの発達と共に認知や感情、学習や記憶などのより高度で複雑な発達が進んでいく。また、他者とのかかわりの中で自我が芽生え始めると、大人や周りの友達の行動を模倣したり観察したりしながら多くのことを学習していく。この時期のこどもとかかわる大人の存在と影響は大きく、こどもひとりひとりの発達を支える保育者の役割は非常に大きい。

保育の専門性と保育の質は関連している(秋田・箕輪・高櫻, 2007)。保育の質とは、文化や社会制度、地域といった広い概念から、各保育所や幼稚園のカリキュラムとその評価、こどもを取り巻くすべての環境、そして保育者の資質やスキルなど(Melhuish, 2001; Moss, 2007)すべてを含んでいる。こどもと直接かかわる保育者の資質やスキルが重要であることは言うまでもない。質の高い保育はこどものその後の発達にポジティブな影響を与えることから(Vandel, Belsky, Burchinal, Steinberg, Vandergrift, & NICHD Early Child Care Research Network, 2010)、我が国で2015年度に施行された「子ども・子育て支援新制度」においても良質な保育の重要性が再認識されている。Laevers (1994)は、Child Involvement Scale (CIS)という質尺度を作成し、保育者とこどもの相互のかかわりを「過程の質」のひとつとし、大人の感性や奨励するかかわりを挙げている。また、Pianta, La Paro & Hamre (2008)によって作成された尺度(Classroom Assessment Scoring System: CLASS)は、保育者のかかわり方そのものを評価対象としており、「情動的サポート領域」の下位項目には、CISと同様に感性や保育者の雰囲気などが挙げられている。このように、保育者の言動はこどもの発達や学習に大きな影響を与える重要な専門性のひとつであると言える。

保育者がこども個人もしくは全体とかかわろうとするとき、その大半は言語的にかかわりになる。入園して初めての集団生活を送るこどもたちは、新しい環境の中で新しい生活の流れに適応していく。片付けの時間になれば保育者の言葉かけによって目の前のものを片付け、トイレに行き、椅子を指定された場所に置いて座り、朝の会が始まるのを待つ。状況にふさわしい行動をとったこどもを認めポジティブな言葉をかければ、こどもはその行動を学習し、その後その行動は増加するだろう。反対に、そのときの状況にふさわしくない行動をとったこどもにネガティブな言葉をかければ、その行動は修正され減少していくだろう。このように保育者の言葉かけは、こどもの行動や生活の SCRIPT を形成するなど学習を支える重要な刺激となっている。行動分析学では、言語的な教示によって行動が左右される行動のことを「ルール支配行動 (rule-governed behavior)」という(Skinner, 1989)。保育の現場で言えば、「友達と一緒に遊びたいときは仲間に入れてって言うといいかもしれないね」というアドバイスや、「友達が貸してくれなかったからって叩いたらダメだよ」という禁止は、乳幼児期のこども集団におけるルールを言語で教示しており、この教示がその後のこどもの行動を左右することになる。乳幼児期の保育や教育に携わる者は、発達に応じたルール支配行動を形成し、そのルールがこどもの内面に組み込まれ、自分自身でコントロールできるよう、その基礎の芽生えを育むた

めのスキルが求められる。

行動分析学は、特別支援教育（武藤，2007）や治療教育（小林，1995）において幅広く応用されているものの、定型発達児の保育に焦点をあてて研究したものはほとんどない。また、保育者の専門的スキルについて問うとき、発達理解や実践力、協働や省察的思考、共感的態度などのワードは多く見られるものの、保育者の発する言葉について行動分析的に検討した研究もほとんどない。そこで本研究は、保育実践において保育者の言葉かけがどれだけ重要なものと認識されているのか現状を明らかにすることを目的に、保育経験者を対象に調査を行う（研究 1）。また、保育中の保育者の言葉かけとこどもの行動を観察し、どのような保育者の言葉かけがこどもの行動を促すのかを明らかにしていく（研究 2）。

研究 1

保育の専門的スキルというと、こどもの発達理解や日誌・指導案を書くスキル、保護者との関係を円滑に進める対人関係能力、職員連携のための協働などが挙げられるが、こどもの行動を左右する言葉そのものを意識し、目の前のこどもにとってふさわしい言葉は何か、どのような言葉をかけることが次の行動や今後の発達につながるか、ということを考えながら言葉を選択することは保育者にとって非常に重要なスキルである。研究 1 では、保育経験者を対象に、保育の中で言葉かけがどれだけ重要と認識されているかを明らかにするため、質問紙調査を行う。

方法

対象者 北海道、関東圏、関西圏に在住の保育経験者（幼稚園、保育所、認定こども園、施設での勤務経験がある者）、女性 83 名、男性 3 名の合計 86 名（平均年齢 36.23 ± 12.2 歳、保育経験歴平均 11.8 ± 9.12 年）を調査対象とした。

手続き 調査対象者には事前に調査の目的と内容、個人情報保護等について説明し、承諾した者のみ質問紙を郵送し協力を得た。郵送した書面においても同様の説明を行い、改めて調査協力を依頼し、承諾した者のみ回答した。回答者は無記名で郵送にて返送するよう指示した。回収率は 100%だった。

調査内容 フェイスシートでは年齢、保育経験年数、実習生指導経験の有無と人数について尋ねた。質問項目は、①実習生に指導することの多い項目について（複数回答、上位 3 位）、②こどもとかわる場面で気をつけていること（順位法）、③こどもに言葉をかけるときに気をつけていること（順位法）、④保育者の言葉がこどもに及ぼす影響について尋ねる項目（自由記述法）の全 4 項目とした。④については、テキストマイニングのためのフリーソフトウェア KH Coder version 2.00f を使用し、自由回答の中の頻出語を解析した。抽出された語がどの語と強い関連があるかを確かめるため、語と語の関係を共起ネットワークにより視覚化した。共起ネットワークは、中心性に基づき語の出現頻度や語と語の関連を表すことができる（田中，2013）。ここでは、8 語以上出現した語を分析の対象とした。

結果と考察

質問項目②と③については、川口（2018）で報告を行ったため省略する。①の質問項目に関する有効回答数 63 名のうち、62 名が実習生の指導を経験したことがあり、保育経験年数の平均は 12 ± 9.1 年、実習生の指導人数は平均 42.8 ± 70.3 名（最小 0 名～最大 300 名）であった。これまでの①実習生に指導することの多い項目について上位 3 項目を尋ねた結果を図 1 に示す。指導項目として最も多かったのは「言葉かけに関すること」で、「発達理解に関すること」「日誌に関すること」が後に続いた。「積極性」や「挨拶」は実習評価の項目として取り入れられており、また、「日誌」や「指導案」も実習において指導される項目である。しかしながら現状は、こども達への言葉のかけ方が最も多く指導されていることが明らかとなった。

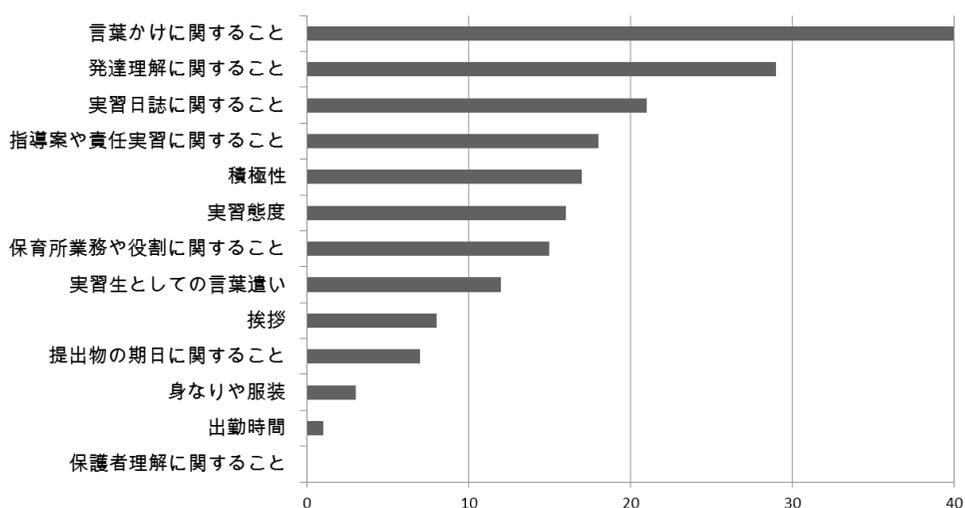


図 1 保育実習において保育士が実習生に指導することの多い項目

質問項目④の保育者の言葉はこどもにどのような影響があると感じるかを自由記述で尋ねた結果、8 回以上出現した語を表 1 に示す。最も多く頻出した語は「言葉」（79 回）で、「こども」（65 回）、「影響」（32 回）、「保育」（27 回）が続いた。また、8 回以上頻出した語について、どのような語と語が関連し合っているのかを共起ネットワークで示す（図 2）。「気」「大切」「成長」が一つのまとまりになっているが、「気」は「気をつける」という言葉で使われていることが多く、こどもへの言葉かけは成長にとって重要な刺激であり、大人は配慮して使う必要があるというカテゴリといえる。「悪い」「良い」「大切」というカテゴリにおいては、大人の言葉は時としてこどもに悪い影響を与えることがあるということ、だからこそ大切に扱う必要があるという意識が表れており、大人の言葉が持つ強い力を表すカテゴリといえる。

表 1 自由記述から得た頻出語（頻出回数 8 回以上）

頻出語	回数	頻出語	回数	頻出語	回数
言葉（名詞）	79	一つ（名詞）	13	気（名詞）	10
こども（名詞）	65	成長（サ変名詞）	13	大きい（形容詞）	10
影響（サ変名詞）	32	気持ち（名詞）	12	話す（動詞）	9
保育（サ変名詞）	27	大人（名詞）	12	悪い（形容詞）	8
心（名詞）	15	大切（形容動詞）	11	良い（形容詞）	8
伝える（動詞）	14	考える（動詞）	11		

大人からこどもへの言葉かけが、こどもの発達や思考、パーソナリティに影響を与えるということは、多くの保育者が実践を通して理解していることが明らかとなった。自由記述には、以下のような回答があった。

- ・言葉によって支えられたり救われたり喜んだり、あるいは悲しみに落とされたりする。大人以上に言葉をストレートに受け取るこどもにとって、言葉の影響力は大きい。
- ・言葉かけ一つで良い方向にも悪い方向にも行ってしまう。
- ・親以外の身近な大人なので、素直にこどもの中に入っていくもの。そのため、伝える言葉には気をつけて選ばないと、その後の成長に大きく影響する。
- ・保育者の言葉は悲しみの薬、喜びの伴侶、勇気づけ、慰めるもの。その子に一生付き添うもの。
- ・保育者の言葉は、初めて聞く言葉、興味の湧く言葉、親しみのある言葉になるもの。一つ言葉で心が左右されてしまう影響力がある。
- ・言葉一つでそのこどもの行動や、発達、成長にかかわるもの。言葉一つでその後の行動にも変化はあると思う。その積み重ねが発達や成長にかかわっていく。

研究 1 の結果から、多くの保育者はこどもにかける言葉の意味や重たさを理解していることが明らかとなった。また、言葉は「その時」のこどもの行動や発達に影響するのみならず、「その後」の発達にも大きく影響するものであると認識し、常に意識した言葉かけを行っていることも明らかとなった。保育者の質について問う時、例えば Laevers (1994) による Child Involvement Scale (CIS) では、大人の感受性や奨励するかわりが挙げられ、また、Pianta, La Paro & Hamre (2008) による Classroom Assessment Scoring System: CLASS も、「情動的サポート領域」の下位項目に感受性、保育者の雰囲気などが挙げられているものの、こどもに対する言葉かけについて触れられることは少なく、スキルとして取り上げられることはほとんどない。本研究結果から、保育の質、保育者の専門性の一つとして「言葉かけ」というワードが重要であることを示唆する。

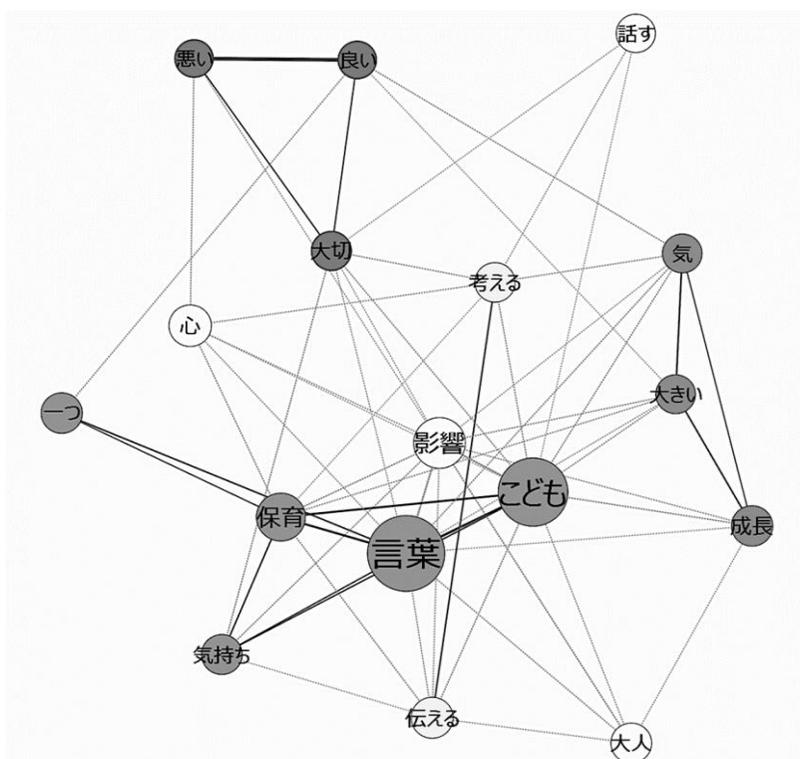


図 2 保育者の言葉がこどもに与える影響について自由記述から得られた共起ネットワーク (サブグラフ)

研究 2

方法

対象者 東京都内にある幼稚園の年少クラスを調査の対象とした。

手続き 園児の登園時間前に、調査対象となるクラスにビデオカメラ (SPanasonic 製 HC-V360MS デジタルハイビジョンカメラ) をこどもたちの手の届かない、注意の行きにくい天井に 1 台設置した。データ記録日は 2018 年 9 月 19 日・26 日、10 月 3 日・17 日・31 日、11 月 7 日・14 日の計 7 日間で、データ分析の範囲はこどもが登園しクラスに入室した段階から始まり、全園児が降園するまでの間とした。分析するにあたっては、対象者の担任教諭がこどもにかける言葉とこどもの行動の変化の有無、反応時間を抽出し分析を行った。また、調査を実施するにあたっては、調査の概要と目的、個人情報の保護や倫理的配慮についての説明を行い、調査対象園からインフォームドコンセントを得た。

結果と考察

7 日間の保育におけるこどもへの言葉かけ内容について、保育者がこどもの行動に影響を与えようとした言葉かけを抽出し、カテゴリに分類した結果を表 2 に示す。最も多かった言葉かけは「～なさい (～して)」や「～してちょうだい」という「命令」(61 回) で、「～ですか?」「～なの?」や今

何をする時間であるかを質問形式で問う「確認」(22回)、「～してごらん」「～しよう」という「誘導」(20回)が続いた。「命令」が最も多かった背景に、夏休み明けの保育であったことが考えられる。しかし、「命令」によってこどもの行動の変化が見られた回数は24回で、変化が見られない回数が37回となり、「命令」がこどもの行動を促すのは39%ということがわかった。「確認」という言葉かけは73%、「誘導」は65%でこどもの行動を促す言葉かけであることが明らかとなった。こどもの行動変化が最も起こりやすい言葉かけは「助言・提案」で、100%の確率でこどもの行動変化が見られ、反応への時間も1sと短かった。褒めにつながる「ポジティブ状況の提示」も同様の確率と反応時間で、こどもが今とっている行動に対しポジティブなフィードバックを即時に提示することは、その時の状況やその場にふさわしい行動を強化することにつながる。

表2 保育者の言葉かけ内容のカテゴリとこどもの行動変化

カテゴリ	言葉かけ回数	行動変化の回数	反応平均時間(s)
命令	61	24	9.6135
確認	22	16	1.7778
誘導	20	13	2.8
ネガティブ状況であることの提示	17	8	11.833
ネガティブ状況を予測した指摘	14	12	1
名前	11	3	4.333
行動の禁止	8	4	11.166
行動の許可	7	4	1
助言・提案	7	7	1
ポジティブな行動であることの提示	7	7	3
ネガティブ状況下での他者視点の導入	6	2	1
大人の想いの伝達	6	3	1
嫌子提示	10	3	55.5
応援	6	2	1
可能性の断定	4	2	62
好子削除	3	1	1
お礼	2	2	1
現行動への否定的肯定	2	2	1
人格指摘	2	0	-
擬人化	1	0	-
依頼	1	1	1
他児をポジティブに評価し注意を誘導	1	1	1
無反応	1	1	42

ただ注意すべきことは、単純にこどもを褒めるということではなく、その時にとったふさわしい行動に対するポジティブな言語的フィードバックという観点が重要であるということである。本研究結果から、言葉かけのスキルとは、この判断と対応ができるようになるということを提案する。

昼食時間に最も多く見られた言葉かけに嫌子の提示があった。昼食時間内に食事が終わらない子や

食べることも友達と話が夢中になる子、嫌いなものがあり手が止まってしまう子に対し、こどもたちがネガティブに感じていることを提示し、「食べない」行動を減らし「食べる」という行動を促そうとする。しかしながらこの言葉かけによって「食べる」行動が増えるかというところではなかった。「食べる」という行動につながったのは30%で、70%は行動に変化が見られなかった。また、30%に行動の変化があったものの、その行動までの時間は平均55.5sと最も時間を要していた。本結果から、嫌子になる言葉を提示し行動を操作しようとするのは、こどもにとってネガティブな感情体験になるだけであり、行動を促す言葉ではないことを示唆する。

また、行動変化が見られにくく、反応までの時間を要する言葉かけカテゴリの一つに「名前」があった。直接行動の変化を促したいこどもの「名前」を呼ぶだけのものだが、出現回数は11回見られ、そのうち8回(73%)は行動に変化は見られなかった。直接こどもの名前を呼ぶ場面はネガティブな状況下がほとんどで、おそらく保育者は名前を呼ぶことでこども自身がとっている行動に注意を向けさせようとする意図があるのだろう。しかし、自分の行動を客観視するのが難しい年齢においては、大人から名前を呼ばれている背景に行動修正の意図が含まれていることを読み取ることは難しいのかもしれない。このことから、年少児へは、名前を呼ぶだけではなく、具体的な行動への注意を促し、大人による客観的な行動評価をフィードバックすることが効果的である可能性を示唆する。

総合考察

保育の現場においては、こどもにかける言葉の重たさを理解し、慎重に選択していることが明らかとなった。その慎重さは、こどもの「今」に影響するだけでなく、これからの人格や発達、学びに影響することを理解していることによる。自由記述にもあるように、保育者はこどもにとって初めて信頼を形成し関係を深めていく他者になることが多い。保育の専門性や保育の質を問うとき、保育者の言葉かけについて追求されることはあまりない。本研究結果から、保育の質を考える時は保育の中に最も多くある言葉という刺激について検討する必要性を示唆する。

また、実際の保育におけるこどもへの言葉かけ内容について分析した結果、24のカテゴリに分類された。カテゴリによってその後のこどもの行動に変化を与えるものもあれば、全く与えないものもあった。ネガティブな言葉刺激は、こどもの行動に影響を与えないばかりか、こどものその時の感情やその後の感情にも影響を与える可能性がある。例えば、一般的に良くないと言われる「嫌子」を提示する言葉は、明らかに行動を変えないカテゴリであることが明らかとなった。

このように、実践の中にある言葉刺激がこどもに与える影響を集め蓄積していくことで、こどものよりよい発達と学びを支える言葉かけが明らかになる。今回の研究では、年少クラスを対象に検討を行ったが、年中クラスや年長クラスではまた言葉かけ内容のカテゴリ数や回数は変わる可能性がある。また0歳、1歳、2歳クラスでは、言葉かけのカテゴリはかなり変わり、そこにはイントネーションやリズムなどの要素も加わり、複雑な言葉かけが行われていることが予想される。今後は、0・1・2歳児クラスでの言葉かけ、4・5歳児クラスでの言葉かけ内容について分析を行い、大人の言葉かけ内容が年齢によってどのように変化するか、また、大人の言葉刺激がこどもの行動にどう影響を与える

か検討していく。

保育の質や保育の専門性について語る時、こどもに与える影響を実証しながら検討していく必要がある。今後は、こどもの発達と学びの視点から保育者に求められるスキルや保育の質について検討していく。

引用文献

- 秋田喜代美, 箕輪潤子, 高櫻綾子 (2007). 保育の質研究の展望と課題 東京大学大学院教育学研究科紀要, 289-305.
- 川口めぐみ (2018). 実践における保育の質—保育者の言葉かけとこどもの反応を行動分析的視点から分析する— 発達研究, 32, 161-164.
- 小林重雄 (1995). オペラント条件づけからノーマライゼーションまで— 障害児の治療教育を通して— 行動分析学研究, 8, 103-105.
- Laevers, F. (1994). The Leuven Involvement Scale for young children. Center for Experiential Education, Leuven.
- Melhuish, E. (2001). The quest for quality in early day care and preschool experience continues. *International Journal of Behavioral Development*, 25, 1-6.
- Moss, P. (2007). Bringing politics into the nursery: Early childhood education as a democratic practice. *European Early Childhood Education Research Journal*, 15(1), 5-20.
- 武藤 崇 (2007). 特別支援教育から普通教育へ—行動分析学による寄与の拡大を目指して— 行動分析学研究, 21, 7-23.
- Vandel, D. L., Belsky, U., Burchinal, M., Steinberg, L., Vandergrift, N., & NICHD Early Child Care Research Network. (2010). Do effects of early child care extend to age 15years? Results from the NICHD Study of Early Child Care and Youth Development. *Child Development*, 81, 737-756.
- Pianta, R., La Paro, K. M., & Hamre, B. K. (2008). Classroom Assessment Scoring System: Manual Pre-K, Paul. H. Brookes.
- Skinner, B. F (1989). The behavior of the listener. In SC Hayes (Ed.), Rule-governed behavior: Cognition, contingencies, and instructional control, 85-96. Reno, NV: Context Press.
- 田中京子 (2013). KH Coder と R を用いたネットワーク分析 久留米大学コンピュタージャーナル, 28, 37-52.

謝 辞

本研究は、神奈川県座間子どもの家保育園、札幌市藤学園藤幼稚園、札幌市認定こども園新琴似幼稚園、大原学園姫路校、駒澤学園駒沢女子短期大学付属こまざわ幼稚園をはじめ、札幌市内、栃木県

内，関東圏内，関西圏内の保育経験者のみなさまに多大なるご協力を頂きましたこと，心より御礼申し上げます。また，本研究を進めるにあたり，ご支援を賜りました公益財団法人発達科学研究教育センターに心より御礼を申し上げます。